



小 論 文

コース	ページ	解答用紙枚数	時 間
教育実践コース 心理学・幼児教育コース 人文科学コース	1～10	1 枚	120 分
特別支援・生活科学コース	11～22	1 枚	120 分

学 力 検 査

コース	教 科	試 験 科 目	ページ	解答用紙枚数	時 間
人文科学コース	英 語	英語コミュニケーションⅠ， 英語コミュニケーションⅡ， 英語コミュニケーションⅢ， 論理・表現Ⅰ，論理・表現Ⅱ， 論理・表現Ⅲ	23～30	4 枚	120 分
数理自然科学コース	数 学	数学Ⅰ，数学Ⅱ，数学Ⅲ， 数学A，数学B，数学C	31～35	5 枚	120 分
人文科学コース	国 語	現代の国語，言語文化， 論理国語，文学国語， 古典探究	36～49	4 枚	120 分

(49 ページから逆に一～十四)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまでは，この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は 49 ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には，監督者に申し出ること。
3. 解答はそれぞれ指定の解答用紙に横書きで記入すること(国語は除く)。
4. 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
5. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
6. 解答用紙は持ち帰らないこと。

問題文訂正

小論文（教育実践コース，心理学・幼児教育コース，人文科学コース）

該当箇所	5 ページ 下から 4 行目
誤	…，子どもの自分の性別に対する認識， 性自認どのように発達させるかと…
正	…，子どもの自分の性別に対する認識， 性自認 <u>を</u> どのように発達させるかと…

問題文補足説明

国語（人文科学コース）

該当箇所	49 ページ（一ページ） 右から 7 行目
	^{おぼ} 憶えて （＊ふりがなの追加）

該当箇所	45 ページ（五ページ） 右から 3 行目
	^{とり} 鶏 （＊ふりがなの追加）

該当箇所	41 ページ（九ページ） 右から 8 行目
	^{さくれつ} 炸裂 （＊ふりがなの追加）

教育実践コース，心理学・幼児教育コース，人文科学コース

- (注意)
- ・解答は指定された解答欄に横書きで記入し，字数は指定を超えないこと。
 - ・解答用紙は1行が20字で，全部で1200字(60行)となっている。
 - ・解答の際，句読点，引用符，カッコなどは，いずれも1字に数える。ただし，行末の句読点などは字数に含まれないものとする。

次頁の〈資料〉は，森口佑介『つくられる子どもの性差「女脳」と「男脳」は存在しない』(光文社新書，2024年)の中の一部である(ただし出題にあたり原文の一部を変えている)。これを読んで，以下の問1～問3に答えなさい。

問1 下線部①「子どもの能力や行動の性差をつくり出している可能性がある」について，その理由を資料の内容を踏まえて300字以内で説明しなさい。

問2 下線部②「こういう子どもの性認識や性自認」として筆者はどのようなものを提示し，どのような問題を示していますか。300字以内で説明しなさい。

問3 本文章の内容を踏まえて，あなた自身は，子どものジェンダーステレオタイプを減らすためにどのような方略が適切だと考えますか。理由も含めて，600字以内で説明しなさい。

<資 料>

大人のかかわり

筆者は決して、性ホルモンを含めた生物学的な要因が性差に関与する可能性を軽視するわけではありませんが、それよりも環境要因に注目しています。

(途中省略)

親を含めた周りの大人のかかわりが、ほんのわずかであったとしても、子どもの能力や行動の性差をつくり出している可能性があるのです。

このような話を聞いて、「私はそんな信念を持っていない」とか「私はそんなかかわりをしない」と思われるかもしれません。ですが、ここまでも触れてきたように、難しいのは、大人はこうしたかかわり方を、意識できないレベルで行っているということです。私たちは子どもを「女の子」とか「男の子」と認識すると、行動を無意識的に変えてしまう可能性があります。こういう我々の行動について見ていきましょう。

「Baby X」実験

私たちの中に、子どもの性別に対する思い込みがどれほど深く根付いているか、そしてその思い込みが、私たちが子どものためにする選択にどれほど影響を与えるかについて、考えさせられる実験があります。これは、イギリスの公共放送 BBC でも放送され、大きな反響を呼びました。

この実験は、様々なおもちゃ、たとえば、人形、車、ロボット、積み木などがたくさん並んだ部屋で行われます。その部屋の中に、お座りができるようになって、まだおしゃべりはできないくらいの月齢の子どもたちがいます。子どもたちは、いわゆる「女の子らしい」もしくは「男の子らしい」^{かつこう} 恰好をしています。あなたがその部屋に入って、子どもたちと遊ぶ様子を想像してください。この実験の核心はここにあり、子どもたちと遊ぶときに、私たちがどのような行動を取るかが調べられます。

確かに子どもたちにはおもちゃの好みがあります。女兒は人形を好み、男児は乗り物を好みます。そして、私たちは、自分たちの経験や、メディアからの情報によっ

て、そのことを知っています。

目の前にスカートをはいった子どもが現れたとき、あなたはどのようなおもちゃを手取るでしょうか。実験の結果、大人たちは、女の子の服を着た子どもには人形やピンク色のふわふわしたおもちゃなど、通常女の子向けとされるものを手渡しました。逆に、男の子の服を着た子どもたちと対面すると、車やロボットを選びました。このような行動は、実験に参加した多くの大人が「自分は性別の固定観念を持たない」と信じていたにもかかわらず発生しました。

これはBBCで放送された内容なのですが、内容が若干誇張されているので、実際の心理学研究についても触れておきましょう。最も初期の実験では、赤ちゃんに「女の子らしい」もしくは「男の子らしい」^{かつこう} 恰好をさせるのではなく、男女どちらにも見える赤ちゃんを女の子だと紹介する場合、男の子だと紹介する場合、性別に関して言及しない場合で比較をしています。

実験の結果としても、女の子だと紹介される場合にのみ結果が顕著で、大人は「女の子らしい」おもちゃを選ぶ傾向があることが示されています。

これらの研究は、私たち大人が、子どもを「女の子」と思うか、「男の子」と思うかによって、その子どもの行動や好みについて決めつけを行っていること、そして、その決めつけによって子どもの好みや行動をつくり出している可能性があることを示しています。

感情の決めつけ

おもちゃの好みくらい、決めつけてもいいと思った方もいるかもしれません。ですが、もう一歩、想像力を働かせてみてください。おもちゃだけではなく、能力や行動の決めつけを、子どもの性別に基づいて行ってはいないでしょうか。

次に紹介するのは、感情についての同様の実験です。先の実験と同様に、赤ちゃんを「女の子」もしくは「男の子」として紹介します。その紹介を受けた大学生が、赤ちゃんの感情について評価しました。つまり、実際には同じ赤ちゃんであるにもかかわらず、女兒もしくは男児と思い込むことによって、その赤ちゃんの感情の受け取り方に違いがあるかを調べたのです。要は、感情の性差についての思い込みがあるのかどうかを調べていることになります。

(途中省略)

まず、男子大学生についての結果です。子どもとの接触経験が多い男子大学生は、子どもを「男の子」と紹介された場合に、その子どもの感情を強く感じました。一方、子どもとの接触経験が多い女子大学生は、子どもを「女の子」と紹介された場合に、その子どもの感情を強く感じたようです。これは、子どもとの接触経験が、感情に対する思い込みをさらに促進させたためだと考えられます。経験があると、子どもの気持ちをわかると過信してしまうのかもしれませんが。今となっては研究者として子どもとの接触経験が多い筆者も気を付けなければならないところですよ。

感情の種類に関しては、子どもを「男の子」と紹介された場合に、より楽しそうだと評価されたようです。この傾向は特に男性の大学生で強いという結果でした。先の「女性のほうが笑顔が多い」という思い込みとは一致しない結果ですが、実際の子どもの性別とは別に、大人のほうが「女の子」と思うか、「男の子」と思うかによって、その子どもの気持ちを過剰に評価してしまう傾向があります。

これらの研究は、赤ちゃんを「女の子」もしくは「男の子」と思い込むだけで、大人の赤ちゃんへのかかわり方が変わることを示しています。BBCで紹介されるくらいに印象深い研究ですが、このようなセンセーショナルな効果はどの研究でも見られるのでしょうか。

メタ分析はないのですが、これにかかわる研究の系統的なレビューによると、このような効果は、いくつかの要因に影響を受けることも示されています。

まず、先に紹介したような、女の子と紹介された場合は女の子向けのおもちゃを、男の子と紹介された場合は男の子向けのおもちゃを渡すという研究結果は、比較的頑健なようで、ある程度は信頼してよさそうです。

これ以外だと、大人よりも、子どものほうが、思い込みの影響が強いようです。たとえば、子どもを対象にした場合、男の子と紹介された赤ちゃんに対して、より大きく、強く、うるさいと評定する傾向にあったようです。大人よりも、素直に、赤ちゃんを「男の子」と思ってしまうのかもしれませんが。

この系統的レビュー自体が1989年と古いので、現代ではこのような傾向は変わっているかもしれませんが。確たる証拠はありませんが、「女の子」もしくは「男の子」と紹

介されたときに大人が行動を変える傾向は時代とともに変化し、現代社会においてはその影響が弱まっている可能性もあるでしょう。

ただ、子どもの性別に対する思い込みは未だに強いようにも思います。特に、子どもに対しておもちゃをプレゼントする祖父母の世代において、女の子はこうあるべき、男の子はこうあるべき、という信念は根強く残っているでしょう。

このような大人の無意識的なかわりが、子どもの能力や行動の性差をつくり出し^①ている可能性があるのです。

心の性差から進路の性差へ

大人たちによってつくり出された子どもの心の性差は、小さいものではありませんが、子どもたちの進路や職業選択に影響を及ぼす可能性が示されています。

つまり、空間認知などで見られる行動や能力の小さな違いは、時間とともに大きな性役割の違いに影響するのです。これらの違いは、社会的な期待、教育、親の態度、そしてジェンダーステレオタイプによって増幅され、明確な性役割につながる可能性があるのです。

たとえば、中学生のときの心的回転課題において男子が得意であることが、男子の科学成績の高さと関連し、思春期初期から生徒の STEM 分野への関心に影響を及ぼす一つの要因となる可能性があります。

これが、小さくても初期の心の性差を軽視してはいけない理由です。ちょっとした性差を、無意識のかかわりで大人や社会が増幅し、気づいたときには子どもたちの進路や職業選択に影響を及ぼしてしまっているのです。

さらに言えば、大人が持つジェンダーステレオタイプを知らず知らずのうちに子どもたちが取り入れて内面化し、その結果として自分の行動を変化させてしまうこともあります。

このことは、子どもの自分の性別に対する認識、性自認どのように発達させるかということとも関連してくるので、その点について説明します。

子どもの性別認識

子どもは、いつごろから、自分を「女の子」「男の子」とみなすようになるのでしょうか

か。これは、自分という意識の発達と密接にかかわってきます。子どもは、2歳ごろから鏡に映った姿を自分だと認識したり、写真に写った自分を選んだり、自分の名前を呼んだりするようになります。

これと時期を同じくするか、やや遅れて、子どもは自分の性別を認識するようになります。早い子であれば2歳くらい、3歳になればほとんどの子どもが、自分が女の子であるか、男の子であるかを認識するようになります。

ただ、3歳くらいだと、性別に関する認識がまだ不十分であることが知られています。女の子のような姿をした男の子を見ると女の子だと思ったり、その逆だったりします。6歳くらいまでに、髪型や服装などが変わってもその人の性別は変わらないことを理解するようになります。

このくらいの時期には、「女の子」と「男の子」が別々のグループであることを意識し始め、同性の仲間集団に適応しようとし始めます。女の子は女の子と遊ぶようになり、男の子は男の子と遊びがちになります。

一方、同性の仲間内での自分の位置づけを認識し始めるのは小学生になってからです。一般的に、子どもは小学生になると自分と他人を比較するようになります。性別に関しても同様で、同性の友達と自分を「女らしさ」「男らしさ」などの面でも比較するようになるのです。

とはいえ、昨今では、性別を「女性」と「男性」の二つに区別できるのか、また、自分の性別が本当に固定されたものなのか、という点が疑問視されています。興味深いことに、最近の研究では子どもが自分の性別に戸惑ったり、不満を持ったりすることも示唆されています。

たとえば、ある研究では、アメリカの小学校1年生、3年生、5年生に対して、自分の性別がしっくりくるかどうかを尋ねました。多くの子どもは自分のジェンダーを自然に受け入れていましたが、2割弱の子どもがどちらのジェンダーにも近いと思わないと回答したことが示されています。

また、女兒のほうが自分の性別に不満を持つ傾向が高いことが示唆されています。これは、社会において男性のほうが得をする側面が多いことが影響しているのかもしれない。

子どもの性自認と行動

重要な点として挙げておきたいのは、② こういう子どもの性認識や性自認が子どもの行動に影響を及ぼすということです。

古い研究ですが、自分の性別を認識できた子どもとできなかった子どもに分類して、その子どもがどのようなおもちゃで遊ぶかを観察した研究があります。その結果、自分の性別を認識できなかった子どもは、性別にかかわらず、女の子向けのおもちゃでも男の子向けのおもちゃでも遊ぶのに対して、自分の性別を認識できた子どもは、女の子は女の子向けおもちゃで、男の子は男の子向けおもちゃで遊んだのです。

この結果は、性別の認識が発達することで、性別に一致するような行動を取りがちになる可能性を示しています。親や家族が子どもに「女の子らしさ」や「男の子らしさ」を求めると、このような傾向は強まるかもしれません。

つまり、子どもは2～3歳ごろに自分を「女の子」や「男の子」とみなすようになるわけですが、その時に、周りの大人の期待や働きかけによって、「女の子らしい」行動や選択、「男の子らしい」行動や選択をしてしまうようになるのです。こういう経験の積み重ねによって、子ども自身がジェンダーステレオタイプを持つようになってしまいます。

これが、子どもがジェンダーステレオタイプを内面化するということであり、これによって子どもの心の性差がつくられる可能性があります。この点について筆者らの二つの研究を基に考えてみましょう。

「賢さ」のジェンダーステレオタイプ

まず、頭の良さや賢さに関するジェンダーステレオタイプについて考えてみましょう。皆さんが天才と聞いて思い浮かべるのは、男性が多いのではないのでしょうか。

もし皆さんが男性を思い浮かべたとしても、これは、科学や哲学の世界は男性社会であり、女性が活躍するのは難しい雰囲気があったためです。また、メディアが発する情報の中にも、「IQ 200 の天才」「クイズの天才」等々、天才として出てくる人物は男性であることが多いのです。この場合も、必ずしも男性のほうが賢いというわけではありません。

ただ、親や教師、私たちの大人の無意識的な一言が、YouTube や SNS で見かけるつぶやきの一つ一つが、子どもに伝わってしまっている可能性があります。

今でも、「女の子に勉強は不要で、大学なんか行かなくていい」「女の子は愛想よくしないと結婚相手がいない」などと考える家庭は、決して珍しくはありません。

こうした親や大人の価値観は子どもに伝わります。そして、子どもが自分に当てはめてしまい、将来の選択に影響を与える可能性があります。

筆者らの研究では、4～7歳の子どもを対象に「賢い」「優しい」という性質を自分と同じ性別に当てはめるか、自分以外の性別に当てはめるかを調べました。具体的には、話の中の登場人物の性別を当ててもらいます。「賢いストーリー」では、職場にもすごく賢い人がいるという話を聞かせて、その人が女性であるか男性であることを、表示された画像から選んでももらいます。また、「優しいストーリー」では、「職場にもすごく優しい人がいる」という話を聞かせて、その人が女性であるか男性であることを判断してもらいます。もちろん、これらのストーリーの中に、その人の性別にかかわる情報は含まれていません。「賢い」もしくは「優しい」というイメージを、子どもが女性に結びつけるか、男性に結びつけるかを調べています。

その結果、「優しいストーリー」では、女兒は女性を選びがちであったのに対して、男児は女性と男性を同じくらい選ぶ傾向にありました。つまり、女兒は優しさを自分の性別と結びつけ、「優しい＝女性」という認識を持っていたのです。これは4歳から7歳まで同様に見られました。主たる養育者が母親であることや、保育士・教師に女性が多いことと無縁ではないでしょう。

一方、「賢いストーリー」では、年齢によって違いが見られました。4～6歳では、女兒も男児も自分の性別を賢いと思っていたのに対して、7歳になると女兒も男児も男性を選ぶようになりました。つまり、「男性＝賢い」という認識を示すようになったのです。

7歳というと、小学校に入学するくらいの年齢ですから、勉強やその成績が意識され始める時期です。賢さや頭の良さについても、関心が出てくるのでしょうか。その年頃になると、女兒は「賢い」という性質を、自分たちに当てはめなくなってしまうのです。これが進展すると、自分には勉強が向かないと思うようになったり、勉強嫌いになったりすることが懸念されます。

実際の学力では、ほとんど差がないか、むしろ女兒のほうが成績がいいという結果との食い違いも気になることです。この研究について色々な方々と話すと、「わざと勉強ができないふりをしていた」と話す女性の多いことに驚きました。このような状況は変えていく必要があります。

「偉さ」のジェンダーステレオタイプ

賢さのジェンダーステレオタイプは、高校や大学への進路選択という意味では重要なテーマですが、筆者がもう一つ懸念しているのが、「偉いのは男性」というステレオタイプです。

日本のジェンダーギャップが世界的に見ても極めて大きいのはよく知られていますが、その中でも特に差が大きいのは、政治家や閣僚の女性と男性の比率、会社等の組織における幹部や管理職の女性と男性の比率、専門職における女性と男性の比率です。いずれも、責任があり、権力を持つ立場ですが、男性のほうが偉い立場にすることが多いのです。

子どもたちが接することの多い小学校の先生でも、教師の比率としては女性のほうが多いにもかかわらず、管理職は男性のほうが多いといういびつな構造をしています。PTA などを見ても、役員は女性が多いのに、会長だけなぜか男性であることも珍しくありません。

報道を見ても、国会議員の会合は高齢の男性ばかり。女性活躍をうたうような会合や委員会でも、メンバーはすべて男性という笑えない状況が少なくありません。会社の社長では、もちろん活躍されている女性は多数いらっしゃいますが、経済団体などのトップは未だに男性ばかりです。

こういう姿を見た子どもたちが、男性は女性より偉いと思ってしまうたり、女性は偉い立場につけないと考えたりすることは、決して不思議ではありません。

筆者らはこの点を実証的に調べてみました。文脈によって結果が異なるのですが、先ほど紹介した「賢いストーリー」と同様に、「職場に偉い人がある」という話を聞いたとき、6歳の男児は「偉い人」の性別として男性を選ぶ傾向がありました。他の年齢の男児や女児では明確な傾向は見られませんでした。

この調査で、やはり小学校に入る前後に、男児が「偉い＝男性」という認識を持つ

ている可能性が示されました。女兒が「偉い＝男性」という認識を持っていなかったことは朗報ですが、結果があまり明確ではなかったため、今後の検討が必要です。

このように、小学校に入る前には、子どもは「賢さ」や「偉さ」に関するジェンダーステレオタイプを持ちません。ですが、小学校に入るくらいになると、自分の性別を明確に認識することや、親やメディアの影響によって、ジェンダーステレオタイプを自分自身に内面化してしまいます。大人が勝手に作り上げた心の性差(のステレオタイプ)を、子どもが内面化してしまうのです。

ステレオタイプはあくまで思い込みに過ぎないのですが、その思い込みが子どもの実際の行動に影響を及ぼしてしまう可能性があります。たとえば、「算数＝男性」という思い込みを持ってしまうと、女兒が算数に対する苦手意識を持ったり、算数を避けるようになったりするかもしれません。逆に、算数が苦手な男子が必要以上のプレッシャーを受けることにもなるでしょう。

「偉い＝男性」という認識を持つと、女兒が生徒会長や管理職などのリーダー的な役割を避けるようになるかもしれません。また、そういう仕事を避けたい男児が無理に押し付けられることもあるかもしれません。自分の好まない選択を強いられる状況は改善する必要があると考えます。

特別支援・生活科学コース

- (注意) ・解答は指定された解答欄に横書きで記入し、字数は指定を超えないこと。
- ・解答用紙は1行が20字で、全部で1200字(60行)となっている。
 - ・解答の際、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字に数え、算用数字およびアルファベットは1マス2字としてもよい。ただし、行末の句読点などは字数に含まれないものとする。

次ページ以下の〈資料〉は、荒井裕樹著『車椅子の横に立つ人』(青土社、2020年)の一部である(ただし、出題にあたり原文の一部を変えている)。

次の問1から問4に答えなさい。

- 問1 下線部①の「感動ポルノ」について、100字以内で説明しなさい。
- 問2 下線部②の「一つの傾向」について、200字以内で説明しなさい。
- 問3 下線部③の「お涙頂戴もの」と「消費者的な態度」について、300字以内で説明しなさい。
- 問4 本文全体を通して、「感動ポルノ」の観点から、現代社会の障害者像についてあなたの考えを600字以内で記述しなさい。

<資 料>

「がんばる^{けなげ}健気な障害者」はどこから来たのか？

日本文学の中の障害者たち

1 はじめに

2016年夏、「感動ボルノ」という言葉が話題になった。障害者がメディアに取り上げられる際、^①しばしば視聴者たちを「感動」へと導く便利な道具として扱われることを批判した言葉だ。言われてみれば確かに、「不幸」や「悲劇」を健気な努力によって乗り越える障害者の姿が涙とともに「消費」されることは珍しくない。

では、「感動ボルノ」と呼ばれるような形で障害者が描かれるようになったのは、いつ頃からで、何がきっかけになったのだろうか。もともとこの言葉は豪州のジャーナリスト、ステラ・ヤングによるものだが、日本においては、どういった文化的土壌から生み出されたものなのだろうか。本章では、私が専門領域とする「日本近現代文学」の中から、その起源の一端を探ってみたい。

「日本文学の中の障害者たち」という副題をかかげたけれど、これには注意が必要だろう。安易にこうしたテーマで文章を書くと、「文学に描かれる客体」としての障害者像が固着してしまい、「文学を描く主体」としての障害者像が不当に小さくなってしまいうからだ。日本の文化史を長いスパンで見返せば、「文学を描く主体」(文化の創造主体)としての障害者は、現在に至るまで決して珍しくはない。

加えて、こうしたテーマで何かを書こうとすると、「障害者のステレオタイプ」という問題に言及せざるを得ないのだが、これがまた難しい。そもそも文学には「ステレオタイプ」がある程度は付き物だし、一口に「障害者のステレオタイプ」といっても、その在り方は時代や社会状況によって様々だ。

これらの点を加味すれば、「文学に描かれた障害者像」について考えると、つまるところ、以下の問題点を分析することになるだろう。

問題点① 「障害者のステレオタイプ」は、社会や時代とどのような関係にあるのか

(たとえば「感動ポルノ」との関連で言えば、「感動ポルノ」の対象になりやすい「ステレオタイプ」な障害者像とは、いつの時代に、どのような社会的背景の中で登場したのか)。

問題点② そもそも「ステレオタイプ」でない障害者の描き方などあり得るのか？
あるとすれば、どのようなものなのか？

問題点②については稿を改めるとして、本章では以下、問題点①について考えてみたい。

2 近代小説の中の障害者像

「日本文学の中の障害者たち」といっても、あまりにも範囲が広すぎるので、ここでは一冊の本をガイドに話を進めよう。「障害と文学(文化)」をライフワークとした俳人・運動家の花田春兆(脳性マヒ)が編集した『日本文学のなかの障害者像(近・現代編)』(明石書店、2002年)である。

本書は、花田が主宰した文芸サークル「しののめ」同人らによる労作で、福沢諭吉の『かたわ娘』(1872年)から宮尾登美子の『^{くら}藏』(1992～93年)まで、障害者が登場する40作品が紹介されている。

この本は、明治から戦前までを扱った第一部と、戦後から現代までを扱った第二部に分かれている。作者自身が障害当事者である作品はひとまず除き、いわゆる「職業作家」によって書かれ、広く一般に流通したものをピックアップして通覧すると、そこには一つの傾向がある。

② 第一部に紹介された作品において、障害者は明らかに「異質」「異様」「異形」な存在で、作品の色調を深める「脚色的要素」として登場することが多く、障害者自身の内面が深く掘り下げられることはほとんどない。数例を挙げよう。

明治の流行作家・広津柳浪(広津和郎の父)の『変目伝』(1895年)は、当時「深刻小説」あるいは「悲惨小説」と呼ばれて流行したジャンルに含まれる。人よりも身体が極端に小さく、顔の半面に(湯傷の痕)が大きく残り(^{いと}厭ふべき目付いとゞ気味悪く)とまで評される主人公が、不幸で愚かで哀れな存在として描かれている(タイトルは「変」な「目」をした「伝吉」という意味)。

国木田独歩の『春の鳥』(1904年)は、知的障害のある少年(六蔵)が城跡の石垣から転落死する悲しい短編である。彼が転落した原因について、母や教師らは、大好きだった鳥になろうとしたのではないかと推測する。少年の明るく純粹無垢なキャラクターが、その悲しみとやりきれなさを増幅させる。

泉鏡花の代表作『高野聖』(1900年)には、自分に言い寄る旅人を馬や魚に変えてしまう妖女が登場する。彼女の夫には重度の知的障害があり、人間を超えた力をもつ妖女にとってさえ不可侵な存在として描かれている。不可思議な力をもつ障害者の存在(例「福子伝説」)は、民俗学の中では有名な類型だ。

大正末～昭和初期には、探偵小説やミステリー小説が流行した。そこに出てくる障害者たちは、卑屈な闇を抱えた異形の者として描かれることが多い。その代表が江戸川乱歩だろう。『一寸法師』(1926～27年)や『芋虫』(1929年)といった作品で、怪奇趣味的な障害者像を多数描いた乱歩のことを、花田は前掲書の中で「障害者のイメージを暗くおどろおどろしくしたもの、陰惨きわまるものとして定着させた張本人の一人であることは、否定のしようもあるまい」と指摘している。

対して第二部では、「障害者自身の心理が緻密に描かれた作品」や、「障害者の親族が抱えた葛藤を深く掘り下げる作品」がいくつか取り上げられている。

前者でいえば、森鷗外の小倉左遷期間の足跡を追いかけた青年(田上耕作)(脳性マヒのような症状が見られる)を描いた松本清張『或る「小倉日記」伝』(1952年)や、吃音のある学僧(溝口)が対人関係でのコンプレックスをつのらせ、金閣寺に放火するに至る心理を描いた三島由紀夫『金閣寺』(1956年)などがあり、後者で言えば、障害児の親が直面する葛藤を描いた大江健三郎の『個人的な体験』(1964年)や水上勉『くるま椅子の歌』(1964～66年)などがある(水上・大江は共に障害者の親でもあった)。

これらに共通しているのは、障害者(あるいは障害者の家族)を「ヒューマン・ドラマ」の文脈で語っているところである。これは裏返せば、障害者(あるいは障害者の家族)は何か「特殊な事情」や「特殊な悩み(内面)」を抱えているという前提がある、ということになる。障害者が、戦前とは異なる形で「特殊な存在」として見られているのである。

花田編『日本文学のなかの障害者像』に紹介された作品を参照する限り、近現代文学史の中で障害者たちは、作品の色調を深める「脚色的要素」という存在から、深刻な事

情を抱えた「特殊な存在」として関心を向けられる対象へと変遷してきたと言えるだろう。

3 現代小説の世界観

では、直近の文学作品ではどうなっているのか。

近年、小説の世界では、「正常／異常」「普通／特殊」の枠組み自体が溶けてしまったような作品を散見するようになってきた。筆者が最も注目する作家の一人に村田沙耶香がいる。彼女の作品の変化そのものが、この時期の小説界を象徴しているように思われる。

村田が野間文芸新人賞を受賞した『ギンイロノウタ』(2008年)は、閉塞的で抑圧的な家庭で育った少女が狂気をつのらせ、抑えがたい殺人衝動に駆られていく様子を克明に描いている。これ自体かなりの衝撃作なのだが、その後に発表した『殺人出産』(2014年)では、「10人産んだら誰か1人を殺せる制度」が成立した近未来を描き、文壇に更なる衝撃を与えた。

この二作に限らず、村田作品を時系列的に追いかけていくと、「狂気」というものが「個人に宿るもの」から「世界そのものが狂っている」ような世界観へと作風が大きく変化していることに気が付く。「異常」や「普通でない」という価値観は、ある個人の問題ではなく、その価値観を内包する社会や世界の問題なのではないか、という観点である。

なお村田の作品には、対人コミュニケーションに困難を抱えた人物が出てくることが多く、「普通」「当たり前」という価値観に馴染めずに苦慮する場面がしばしば描かれる(例『コンビニ人間』2016年)。そうした「漠然とした生きにくさ」を描く点こそ、彼女が多くの読者から支持される理由かもしれない。

社会の「多様性」を尊重しようという機運の高まりとともに、「普通」「当たり前」という価値観が問い直されている。そうしたなかでは、「障害者」という存在も、殊更にクローズアップするほどの重い意味をもち得なくなっているのかもしれない。

例えば山崎ナオコーラの『偽姉妹』(2018年)には、血縁的姉妹(つまり「血の繋がった家族」)を解消して、気の置けない友人たちと擬似的な姉妹関係をつくり、子どもを

育てていくシングルマザーが登場する。作品終盤、彼女らに育てられた青年が出てくるのだが、彼は事故にあって顔面に損傷を受け、眼球を失って義眼を入れている。ただし、彼が義眼であること自体に何か特別な意味が付与されているようには受け取れず、小説世界を構成する人々の「多様性」を表す一部として登場しているように思われる。

「普通」とは異なる身体的特徴をもった人物が、社会の中の「多様性」の一部として（つまり「いろいろな人間のうちの一人」として）、決して不自然でないかたちで溶け込んでいるような世界。こうした世界を描いた小説が登場して久しい。しかし、だからといって、私たちが生きる現実の社会で、障害者が自然なかたちで「多様性」の一部になり得ているかどうかについては、まだまだ検討の余地がある。

事実、出生前診断によって胎児に障害が見つかった場合、圧倒的に多くのカップルが中絶を「選択」したり、せざるを得なかったり、結果的にそうしてしまうような状況が存在する。また、境界線が融解しかかっているからこそ、その境界線を新たに（かつてより厳格に）引き直そうとするバックラッシュもある（某議員の LGBT の人に関する「生産性」云々などはその象徴だろう）。

4 「車椅子」の登場

ところで、「感動ポルノ」と言われるような「障害者のステレオタイプ」は、いつ頃から定着したのだろうか。

「涙を誘う障害者像」については、それこそ明治の昔から存在するし、おそらくそれ以前からもあっただろうし、現在もあるだろう。障害者自身の手による文学作品にも、この種のものは少なくない。

前述した「悲惨小説」といったジャンルでも、「病」や「障害」は定番である。「障害」と明示されているわけではなく、「普通」とは異なる身体的特徴をもった登場人物が苦難に遭って涙を誘うというパターンまで含めて良いのであれば、それこそ小川未明や宮沢賢治の童話にもたくさん見られる。

しかしながら、「感動ポルノ」という言葉が（あるいはこの言葉を用いて「ステレオタイプな障害者像」を批判する論調が）、これらの古典作品まで批判の射程に入れている

ようにも思えない。

③ 世に流通する「感動ポルノ」という言葉は、昔ながらの「お涙頂戴もの」そのものを批判するというよりも、むしろ近年のメディアに登場する「がんばる健気な障害者の姿に感動し、一方的に元気をもらう消費者的な態度」を中心的な仮想敵としているように思われる。だとしたら、そのような「消費者的な態度」を刺激する障害者像が、いつ頃から登場し、なにを契機として定着したのかが問題になる。

以下の論述は、まだまだ調査・分析を積み重ねなければならない仮説として受け止めてもらいたいのだが、私はそのような障害者像の登場は、1964年のパラリンピック東京大会が一つのきっかけとなり、この前後から本格化する「コロニー構想」が定着に一役買ったのではないかと、現時点では推測している。本章では「コロニー構想」にまで触れる余力がないので、さしあたり、パラリンピックに関する事柄を指摘しておこう。

たとえばパラリンピックより以前、敗戦後から1950年代頃にかけて、市井の人々が抱く「障害者像」は、現在の私たちが抱くものとずいぶん違っていたはずである。具体的に言うと、この時期の「障害者像」は、白衣姿で街頭に立ち、募金箱やアコーディオンを持つ「傷^{しょうい}痕軍人」が大きな比率を占めたのではないか。

もともと、戦後の障害者福祉制度が「傷痕軍人」を対象とした施策を基につくられている。「身体障害者福祉法」(1949年)の制定にあたっては、「傷痕軍人」をいかに処遇するかは大きな課題であったし、同法の障害等級評価に関しても「軍人恩給診断」の診断基準が踏襲された(そのため、「麻痺」よりも「欠損」のほうが障害等級が重くなるような制度になっており、脳性マヒなど全身性障害が、四肢の欠損よりも障害等級が低くなるという事態が生じた。これを是正したいという意識が脳性マヒ者たちの結束を生み、後に「青い芝の会」の誕生へとつながっていく)。

現在では、「障害者」といえば「車椅子」を連想する人も多いだろうが、これも一つの「ステレオタイプ」である(車椅子ユーザーでない障害者もたくさんいる)。また、車椅子といえば「街中を移動するためのもの」と漠然と考える人もいるだろうが、そもそも、こうしたイメージ自体、パラリンピックの前にはほとんど存在しなかったはずだ。

歩行できない障害者の外出が珍しかった世代(戦前～戦中世代)の当事者の回想記に

は、幼児期を過ぎても「乳母車」に寄せられた経験が、しばしば苦い思い出と共に登場する。当時、車椅子は決して身近な存在ではなかった。

もちろん、「車椅子」に該当する器具は存在したが、それは基本的に「病人が乗るもの」で「手押車」と呼ばれることが多かった。1956年に田原千^{あき}暉という俳人が『車椅子』という句集を出版しているが、彼は「国立別府保養所」(現・別府重度障害者センター)の入所者であり、花田春兆によれば「車椅子」という今では見慣れた単語も、当時としてはいかにもユニークで新鮮だったという。

こうした「車椅子」のイメージは、パラリンピックを機に大きく変わっていく。再び花田によれば、代々木に作られた選手村は「日本で最初の車椅子使用を念頭に置いた公共建築物」だったようで、この大会が日本の車椅子の普及・発展に大きく貢献したと回想している。

厚い胸板と、ポパイのように太い腕の外国選手、それにも増して日本選手団を貧弱に見せたのは、車椅子の出来の違いでした。

幅も厚みも比較にならないほどあるのに、軽やかな車輪、体の一部のようにぴったりとして意のままに動く自由さ。なんとも武骨で、ギシギシ軋む感じでイヤイヤ動かされているような日本の車椅子とは、それこそ天地雲泥の差があると思われたのです。(中略)このパラリンピックに来日した外国選手団の車椅子は、日本の障害者にとって正に目を覚まさせる黒船の役を果たしたのだ、とも言えましょう。ともかく東京パラリンピック以後、日本の車椅子は質・量ともに大きく脱皮し飛躍することになったのでした。

折しも、時代は高度経済成長期。住宅の様式も「和式」から「洋式」へと変化していったことが、車椅子の普及に大きな影響を及ぼすことになる。

ちなみに、先に紹介した『変目伝』の〈伝吉〉や『春の鳥』の〈六蔵〉は歩行に不自由はない。『高野聖』の夫は部屋にずっと座っている。乱歩の『芋虫』は戦争で四肢を失った男〈須永中尉〉がタイトル通り「芋虫」のごとく這いまわっており、『或る「小倉日記」伝』の〈田上耕作〉は麻痺のある足で山道を歩くのに難儀している。そもそも、これらの小説は、車椅子が広く普及する前の世界が舞台になっているので、車椅子が登場するはず

もない。

現在ではお馴染みの「車椅子に乗りながら健気がんばる障害者たち」というイメージが定着するのは、やはりパラリンピックの影響が大きい。『聞蔵Ⅱ』や『ヨミダス』といった主要新聞の見出し語検索で「車椅子」をひいてみても、やはりこの時期からパラリンピックに関連した記事が増えてくる。記事の内容も、不自由な身体で精一杯スポーツに励む人々の様子を紹介したものが多く、それまでの「車椅子＝病人が乗る手押車」というイメージが大きく変化しているのだ。

5 「哀れみ」と「感動」

とは言っても、これがまた興味深い点なのだが、福祉業界に大きなインパクトを与えたパラリンピック東京大会は、同時代の文学作品にはほとんど描かれていない。三島由紀夫が観戦記を書き、市川崑が記録映画を作ったオリンピックとは大きな違いである。

管見の及ぶ限り唯一の事例が、先にも紹介した水上勉の自伝的長編小説『くるま椅子の歌』だ。この小説は、当時の人々がもつ「車椅子」へのイメージがどのようなものであったかを考える上で、非常に興味深い作品である。

水上勉自身、実際に障害児の娘を持つ父親であった。彼が記した「拝啓 池田総理大臣殿」(1963年)は、日本の福祉施策の貧困さを痛烈に批判し、時の官房長官からの返信を取りつけたこともあって、水上は福祉業界に大きな影響を及ぼすことになる。ただ本章ではそのあたりのことは割愛し、『くるま椅子の歌』の内容を紹介するに留めておこう。

この小説は、オリンピックを直前に控えた東京に住む、とある家族が舞台になっている。サラリーマンの〈椎崎要助〉と専業主婦の〈美弥子〉の間に、〈脊椎破裂〉(「二分脊椎症」の旧名)の障害をもった娘が生まれた。夫婦は我が子に障害があることに衝撃を受けるが、それでも〈^{ふき}路の^{とう}臺〉のように強く生きてほしいという願いを込め、娘に〈臺子〉という名を授ける。

深刻な福祉施設の不足に悩む椎崎夫妻は、東京オリンピックという巨大な祭典に多額の予算を計上するくらいであれば、むしろ福祉予算を増額して障害児収容施設を建

設して欲しいと願う。はじめのうちは、娘の養育方針をめぐる衝突していた夫妻も、様々な人との出逢いを通じて、社会には障害がある人々が多くいることに気が付き、オリンピックが近づくにつれてすれ違いを克服し、娘を育てていくための連帯感を回復する。

この小説の最終部にパラリンピックの開会式が描かれている。〈美弥子〉が〈蔓子〉を背負って開会式を見に行くのだ。その場面を引用しよう。

凜々しい皇太子のお声は、美弥子の耳に快くひびいた。美弥子は聞き終わって、泣いている自分を省みて、思った。

〈本当だわ……人間はみんな……一つなんだわ〉

美弥子は世界は一つだとは思わなかった。いま、大会場の中央部に、それぞれの国名を書いた標示を少女が胸前に掲げ立ち、そのうしろに胸をそらせて、くるま椅子に乗って、整列している二十二カ国の数百人の選手たちは、黙ってそのことばをきいているが、誰もがその からだ・み まが 軀を委せているくるま椅子のリムは、銀色に輝いて、海にちらしたガラスの波のようである。

〈みんな、くるま椅子に乗っているわ……〉と美弥子は思った。

美弥子は思わず背中の蔓子をゆさぶった。蔓子の萎えた足が、わずかに、ねんねこの下からはみ出ている。美弥子は、ねんねこの裾でそれを被った。

〈あんたは歩くのね……くるま椅子になんか……乗らなくてすむように、あしたから、また、小島先生のところでがんばるのね……〉

最後に出てくる〈小島先生〉というのは、〈蔓子〉の機能訓練医である。母の〈美弥子〉は、献身的で慈悲深い父母という二つの車輪(これこそタイトルの〈くるま椅子〉)があつてこそ〈蔓子〉は歩けるようになるという〈小島先生〉の教えを心から信じている。

ところで、細かいことかも知れないが、〈美弥子〉の言葉尻に一つ気になるところがある。〈あんたは歩くのね……くるま椅子になんか……乗らなくてすむように〉という箇所(の〈くるま椅子〉)に付けられた〈なんか〉である。この〈なんか〉の語感に込められた感情を読み解くのは、意外に難しい。

〈美弥子〉がこぼした〈なんか〉には、車椅子とは「本来であれば乗るべきではないも

の]あるいは「乗らないほうが好ましいもの」という発想がにじんでいるように思われる。また、このような発想は、障害者に対する「現状のままでいることは望ましくない人たち」「より良く生きるために努力すべき人たち」といった価値観に通じている。

〈美弥子〉が流した涙は、「不幸で可哀想な人が気の毒で仕方がない」という感情とは、似ているようで異なる種類のものだろう。むしろ、「ここにいるべきでない人たちが少しでも上を目指してがんばっている姿」に対して向けられた涙である。そこに「不幸な者」への憐憫の情がないわけではない。しかしながら、その努力に対して「感動」もしている。

〈美弥子〉は車椅子に乗った人々を、一方では哀れみつつ、また一方では感動し、熱い涙を流すことで明日への活力を得ている。現時点で私が確認する限り、この場面は、「感動ポルノ」という言葉が中心的な仮想敵とする「障害者への消費者的な態度」が文学の中で描かれた初めての場面だろう。

6 終わりに

ところで、このパラリンピック東京大会を、当の障害者たちはどのように観たのだろうか？ 街も交通機関も競技場もバリアフルな状態で、どれだけの障害者がパラリンピックを観戦できたのだろう。おそらく、競技場まで赴くというのは現実的な選択肢ではなく、多くの人はテレビで観戦したのだろう。オリンピックの少し前あたりから、カラーテレビの普及率は大きく高まっている。

パラリンピックを観戦した脳性マヒ者の短歌があるので、最後に紹介したい。

ろうきゅう

籠球にいきいき運ぶ車椅子みな自らの勝者を乗せて

さしぐめど哀れみならずテレビよりパラリンピックの競技明るく

山野井昌子の『歌集 車椅子』(1970年)からの紹介である。作者の山野井は重度の脳性マヒ者である。先述の田原千暉の句集と同じく「車椅子」をそのままタイトルとした歌集だが、1970年では、この言葉はまだ新鮮味を失っていなかったのかもしれない。

一首目、〈いきいき〉〈自らの勝者〉という表現に注目したい。車椅子が「病人」といった暗いイメージからはなれ、^{はつらつ}澀刺としたイメージに変わっていることがわかる。

二首目の〈さしぐめど哀れみならず〉とは、「涙がこみ上げるけれど、その涙は哀れみではない」ほどの意味。山野井はテレビに映る選手たちに、ある種の共感のようなものを覚えたのだろうか。

『くるま椅子の歌』の〈美弥子〉には、「哀れみ」と「感動」が混在していたが、山野井の歌ではこの比率が「感動」側に傾いている。パラリンピックを見る人の内心では、「哀れみ」と「感動」が様々な比率で混合していたのだろう。

障害者が、「哀れみ」でない涙の対象になったという点で、パラリンピック東京大会は非常に興味深い。同大会と、それにまつわる戦後の「障害者像」の変化については、これから詳しく検証されてよい。

英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ，論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

I 次の英文を読み，設問に答えなさい。

We think of words as the basic units of language. When a baby begins to speak, the way the excited mother reports what has happened is: 'Sally (or Tommy) has said her (or his) first word!' We would be surprised at a mother who described little Tommy's or Sally's first utterance as a sentence. Sentences come later, we are inclined to feel, when words are strung together meaningfully. ⁽¹⁾ That is not to say that a sentence must always consist of more than one word. One-word commands such as 'Go!' or 'Sit!', although they crop up relatively seldom in everyday conversation or reading, are not in any way odd or un-English. Nevertheless, learning to talk in early childhood seems to be a matter of putting words together, not of taking sentences apart.

There is a clear sense, then, in which words seem to be the building-blocks of language. ⁽²⁾ Even as adults, there are quite a few circumstances in which we use single words outside the context of any actual or reconstructable sentence. Here are some examples:

- warning shouts such as 'Fire!'
- conventional commands, such as 'Lights!', 'Camera!', 'Action!'
- items on shopping lists, such as 'carrots', 'cheese', 'eggs'.

⁽³⁾ It is clear also that words on their own, outside sentences, can be sorted and classified in various ways. A comprehensive classification of English words according to meaning is a thesaurus, such as *Roget's Thesaurus*. But the kind of conventional classification that we are likely to refer to most often is a dictionary, in which words are listed according to their spelling in alphabetical order.

Given that English spelling is so erratic, a common reason for looking up a word in an English dictionary is to check how to spell it. But another very common reason is to check what it means. In fact, that is what a dictionary entry basically consists of: an association of a word, alphabetically listed, with a definition of what it means, and perhaps also some information about grammar (the word class or part of speech that the word belongs to) and its pronunciation. Here, for example, is a specimen dictionary entry for the word *month*, based on the entry given in the *Concise Oxford Dictionary* (6th edition):

month *noun*. Any of twelve portions into which the year is divided.

It seems, then, that a word is not just a building-block of sentences: it is a
(4)
building-block with a meaning that is unpredictable, or at least sufficiently unpredictable that learners of English, and even sometimes native speakers, may need to consult a dictionary in order to discover it.

(出典: Andrew Carstairs-McCarthy, *An Introduction to English Morphology*, 2018. 一部改変)

設問 1 下線部(1)が指している内容を、本文に基づいて日本語で説明しなさい。

設問 2 下線部(2)の例を、本文に基づいて日本語で全て答えなさい。

設問 3 下線部(3)について、本文に基づいて具体的に日本語で説明しなさい。

設問 4 下線部(4)の内容を、本文に基づいて日本語で説明しなさい。

Ⅱ 次の英文を読み、設問に答えなさい。

From early in life, we need to learn about the world of objects. What is safe to eat? How do you start a fire? How can you keep dry in the rain? We can learn about the physical world by ourselves, but mostly we learn about this world from other people. We are not necessarily learning about social aspects of the world, but the way we learn is intensely social. We learn from others all the time, mostly without being aware of it.

In the 1960s, the social psychologist Albert Bandura (1965) claimed that social learning is unlike other forms of learning because it does not need trial-by-trial reinforcement. Trial-by-trial learning is a basic mechanism that is still studied extensively in animal experiments. It depends on direct experience. We perform an action, and if the outcome is good, we repeat it. If the outcome is bad, we try another action.

Bandura pointed out that, when we learn from others, we can have “no-trial learning.” He proposed that, rather than learning from our own direct experience of rewards and punishments, we can learn by witnessing the behavior of others. Such observational learning can be seen in all animals.

Consider the red-footed turtle. These are not the most social animals. They live lives of almost complete isolation, apart from the brief interactions necessary for reproduction. And yet they can learn to perform a difficult task, simply by observing and copying another turtle that has already learned how to do it. Without a model to copy, the turtle would have to make many unsuccessful attempts and may never even be able to reach the goal at all.

The finding is remarkable in showing that social interest is not a necessary precondition for social learning. Nor is the experience of maternal care a prerequisite for becoming a social learner. Folk beliefs that children must be socialized before they can learn by observation seem rather questionable in this light.

The vivid demonstration of observational learning in a nonsocial *reptile stimulated us and others to think about the basic requirements for this type of learning that does not require conscious processes. How do we learn from others? What are the basic tools through which we exploit the knowledge of others and need not learn afresh? Just by inspection of random cases, we can conclude that the major tool is copying. If we go where others go, we are likely to arrive in places where there is food and water, and hopefully an absence of predators. If we eat what others eat, then the result is likely to be nutritious rather than poisonous.

注 reptile 爬虫類

(出典：Chris Frith and Uta Frith, *What Makes Us Social?* 2023. 一部改変)

設問 1 下線部(1)が指している内容を、本文に基づいて日本語で説明しなさい。

設問 2 下線部(2)はどのような学習ですか。本文に基づいて日本語で説明しなさい。

設問 3 下線部(3)を日本語に訳しなさい。

設問 4 下線部(4)に対する答えは何ですか。本文に基づいて具体的に日本語で説明しなさい。

III 次の英文を読み、設問に答えなさい。

Like everything else, ⁽¹⁾children's memory systems develop as they grow, so they do not function the same way as adults' memory systems. Some memory systems develop rapidly and quite early. For example, some research shows that fetuses can recognize their mother's voice 1-2 weeks before birth. Very young infants develop procedural memories, like learning how to roll over. Further, in the first year of life, babies develop many semantic memories-like learning what a dog is, or who their caretakers are. However, assessing whether very young children's memories are *implicit or *explicit, and assessing episodic memories when children are less verbal, is very difficult.

Infants can learn from a single event and maintain that information for some time. Because infants cannot verbalize what they can remember, ⁽²⁾researchers have used creative tasks to test their memory instead. For example, in one task, researchers tied a ribbon to an infant's foot and attached a *mobile to the other end. They measured how long it took the baby to learn that when they kick their feet the mobile moves. Then the researchers waited a certain amount of time (e.g., a few hours, days, or weeks) and again attached the ribbon to the baby's foot. Because babies are interested in the movement of the mobile, if they remembered their previous experience, they would immediately start kicking their feet, and it would be faster compared to control infants who had not been exposed to the mobile and ribbon before. If they forgot about it, then it would take some time for them to relearn that kicking makes the mobile move, and would be similar to control infants. Using this task and similar tasks, researchers have shown that infants can remember for weeks, depending on the exact age of the infant. Researchers have also shown ⁽³⁾some parallels between childhood memory and adult memory. For example, when the infants are exposed to the ribbon and mobile twice, they will remember for longer if the two exposures were spaced out in time

compared to massed very close together.

However, assessing childhood episodic memories becomes complicated.
(4) Take the example of the infants learning that they kick with a ribbon tied to their foot, they can move a mobile. Through their behavior, kicking quickly when put in the same situation again, they show evidence of retaining that past experience. Thus, we can confidently say they have memory ability. But are they consciously remembering the past experience, as would be required to demonstrate episodic memory? Or have they simply learned an association? In other words, we do not know whether their memory is explicit or implicit. Because they cannot verbalize what they are thinking, we cannot ask them whether they have a conscious awareness of the memory.

注 implicit 暗示的な explicit 明示的な

mobile モビール(空気の流れなどでゆっくりと予測できない動きをする知育玩具)

(出典 : Megan Sumeracki and Althea Need Kaminske, *The Psychology of Memory*. 2024. 一部改変)

設問 1 下線部(1)のうち、胎児の記憶について、本文に基づいて具体的に日本語で説明しなさい。

設問 2 下線部(2)の tasks の内容について、本文に基づいて簡潔に日本語で説明しなさい。

設問 3 下線部(3)の例を、本文に基づいて具体的に日本語で説明しなさい。

設問 4 下線部(4)と言っている理由について、本文に基づいて具体的に日本語で説明しなさい。

IV 次の英文を読み、設問に答えなさい。

In Australia, where sport is a vital part of the culture, “fair go” is a frequently used phrase. It implies “fair treatment,” and represents the national ideal of equal opportunity and treatment for all members of society. Many people shout this during sporting events, usually to exhort their favorites to fight fair and square and never give up. Football is the most popular sport *Down Under.

When I interviewed a local pro football team coach in charge of grooming junior players, he told me about the difficulty of “instructing youngsters in keeping with the fair go principle.” He explained that even among children who are in the same form at school, their levels of physical development differ by their birth months and also the fact that every child grows at their own pace. And a 12-year-old who is just *mediocre may blossom into an MVP at age 16.

(1) 大切なのは将来の芽を摘まないことだ。 If everyone on the team is given the same chance to play, even slow developers may experience the joy of becoming better after repeated tries. I was impressed by this coach, who said it was his job to explain this training method properly to the kids’ parents.

(2) 日本はどうか？ A recent Asahi Shimbun digital edition story was titled “Two in 10 kids never got on the pitch.” It was about national soccer championship games for elementary school pupils, held last December, where 139 out of 749 registered kids ended up sitting out the games.

I imagine this had to do with the “winning is everything” mentality in the background, and my heart goes out to the youngsters who never got their chance to play. (3) 彼らはサッカーが好きで始めたのに、大人の方が勝ちにこだわっていないか。

Ensuring equal playing opportunity for all is now a global trend, and I also understand that there are already some events that require everyone to play. I expect a higher level of awareness on the part of team managers and coaches.

(4) フェア・ゴー精神で子どもたちの笑顔が増えるといい。

注 Down Under オーストラリア mediocre 平凡な

(出典： *The Asahi Shimbun*, May 24, 2025. 一部改変)

設問 1 下線部(1)～(4)を英訳しなさい。

数 学

(数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学B・数学C)

I

次の問いに答えなさい。

(1) $8^x - 5 \cdot 4^x + 2^{x+1} + 8 < 0$ を解きなさい。

(2) $\log_2(x-2) + \log_4 x = 0$ を解きなさい。

(3) $a = \frac{3+i}{2}$ とするとき、 $2a^4 - 2a^3 - 3a^2 + 6a + 5$ の値を求めなさい。
ただし i は虚数単位とする。

(4) 極限 $\lim_{x \rightarrow 0} \frac{\cos 3x - \cos 5x}{x^2}$ を求めなさい。

Ⅱ 次の問いに答えなさい。

(1) 三角形 ABC は半径 1 の円に内接し、頂点 A, B, C の内角はそれぞれ 75° , 45° , 60° である。以下の問いに答えなさい。

(i) 辺 BC, CA, AB の長さをそれぞれ求めなさい。

(ii) 三角形 ABC の面積を求めなさい。

(2) a, b, c は $a < b < c$ を満たす実数であり,
 $a + b + c = 12$, $ab + bc + ca = 45$ を満たす。以下の問いに答えなさい。

(i) $a^2 + b^2 + c^2$ の値を求めなさい。

(ii) abc がとりうる値の範囲を求めなさい。

III

次の問いに答えなさい。

(1) 1 から 6 の目が等しい確率で出るサイコロを 3 回振る。3 回連続で同じ目が出たら 0 点、それ以外は出た目の合計を得点とする。

(i) ありうる最高点と、その点数になる確率を求めなさい。

(ii) 得点が 9 になる確率を求めなさい。

(2) 一般項が $a_n = (n + 1)(n + 2)(n + 3)(n + 4) + 1$ で表される数列について以下の問いに答えなさい。

(i) 全ての自然数 n について a_n は平方数(自然数の 2 乗で表される数)であることを証明しなさい。

(ii) $\sum_{n=1}^{10} \sqrt{a_n}$ の値を求めなさい。

IV 次の問いに答えなさい。

(1) 実数 α, β が $\alpha > 0, \beta > 0, \alpha + \beta = \frac{\pi}{4}$ を満たすとする。

(i) $t = \tan \alpha$ とするとき、 $\tan \beta$ を t を用いて表しなさい。

(ii) $\tan \alpha + \tan \beta$ の最小値と、そのときの $\tan \alpha$ の値を求めなさい。

(2) 1 辺の長さが 1 のひし形 ABCD があり、頂点 A の内角の大きさは 60° である。頂点 A, B, C, D はこの順に反時計回りに並んでいるとする。 $\vec{a} = \overrightarrow{AB}$, $\vec{b} = \overrightarrow{AD}$ とおくとき、次の問いに答えなさい。

(i) 辺 BC の中点を M とするとき、 $\overrightarrow{AM}$ を $\vec{a}, \vec{b}$ を用いて表しなさい。

(ii) 辺 CD 上に点 E を、線分 AM と線分 BE が直交するようにとる。このとき、線分 DE の長さを求めなさい。

(iii) 線分 AM と線分 BE の交点を H とする。 $\overrightarrow{BH}$ を $\vec{a}, \vec{b}$ を用いて表しなさい。

V 2 つの関数 $y = x^2 e^x$ と $y = e^x$ を考える。以下の問いに答えなさい。

- (1) 関数 $y = x^2 e^x$ の極値を全て求めなさい。
- (2) 関数 $y = x^2 e^x$ のグラフの全ての変曲点の x 座標を求めなさい。
- (3) 2 つの関数のグラフの全ての交点の座標を求めなさい。
- (4) 2 つの関数のグラフで囲まれた部分の面積を求めなさい。

I

次の文章は、三十九歳になった「私」が、夏の広島市に滞在し、そこで戦争で亡くなった中学時代の同級生・加来一雄の父親とやりとりし、八月の市内を歩き眺める小説の一節である。これを読んで後の問いに答えなさい。

この図書館長が中学時代の同級生加来一雄の父親であるのを知ったのは最近である。加来の苗字が珍しかったので、彼と同じ姓の館長のことを図書館員にたずねたのだが、レファレンス係はすぐ館長室へ電話をしてくれた。加来は私の姓と同じKなのでクラス名簿の順も机もつづいていた。

館長は私が中学生のときのことを憶えてくれていた。むしろ私が忘れてしまっている事柄をいきいきと話すのであった。油っけのない白髪を右手でかき上げ、眼を細くとじたまま。

「きみは、いや失礼、あなたは息子より靴が半文小さいはずでしたね。三年生になったばかりの頃、中野村へ暗渠排水の作業に一週間合宿したでしょう。息子が帰っていうのに、あなたの靴と間違えてはいたのでマメができ、こんなビツコになっ

注(1) あしせよ
注(2) 注(3)

たんだと痛そうに右脚をひきずってました。息子はあのこと十半でしたから、あなたは十文だったんですね」
あの暗渠排水の勤労奉仕は昭和十九年四月で、アメリカ軍はマーシャル群島に上陸していた。裏作ができるよう湿田から排水する水路をつくる作業だった。農家に五、六名ずつ分宿し、加来と私は一緒だった。

膝までつかる泥田に素足で朝から入るのは、背筋が硬直しそうほど冷たかった。

「寒いろう、これが温泉ならええんじゃが……」

だれかが言った。聞いて私も笑いかけた。

「待て！」

監督にきていた体操の教師が背後で叫んだ。片足だけ泥につけていた私たちは、ふたたび畦あぜに一行に並んだ。

「いま寒いというた奴やつは、すみやかに出てこい」

教師は棒切れを拾うと、早朝の空気を切った。

「名のり出ないのか。そいだけ卑怯ひきょうもの者なんだな。おまえ達は七十年の伝統のなかで最も弱虫のクラスだ。よし、覚悟しろ。犯人が名のり出るまで全員田のなかで正座する！」

私たち五十名は冷たい泥田に一行になって正座した。泥水は臍へそのあたりまできた。土地の人や他の中学の生徒たちがたくさん私たちを遠くから見つめていた。教師はそれらの視線を意識し、誇らしげな足どりで棒切れを振りながら畦の上を行きつ戻りつしている。五分間近くたつても誰れも名のり出なかった。私の下半身はしびれはじめていた。

「先生、ぼくが言ったのです。ゆるして下さい」

そう言つて拳手したのは一番右にいた瀬山啓之せやまひろゆきであつた。

「馬鹿もん！ 級長ともあろう貴様がそんな弱音をはいくはうがない。ひっこんどれ」

瀬山は力なく手をおろし、正座はつづいた。

「ぼくであります」

立ちあがつたのが加来一雄だつた。^A教師は瞬間ためらつた表情をみせたが、棒切れをふりおろして、出てこい！ と怒鳴どなつた。

加来はバンドの上まで泥まみれになって田から上つた。教師は加来が畦に足をあげるやいなや、大ぶりのビンタを張つた。彼は半回転して泥田のなかにどうと倒れた。

私は館長の好意から特別の個室を使用することを許されていた。かなりゆつたりしたスチール製のデスクがあり、内線の電話もついていた。ほどよく冷房はきいてゐるし、希望する書物は電話一本で書庫から運んできてくれる。それに個室にはロッ

キング・チェアもあって、さわやかな午睡もえられた。

私は〔紀要〕に発表する論文を書きあげる予定であった。私の卒業論文は、古代葬制と殯宮挽歌との関連についてであったが、こうしたテーマを選んだのも、私はどうも葬儀に興味をいだいているらしい。死が根源的な意味をもつためには、儀礼が必要なのではないのか。つまり、死は祭祀によって初めて表現をもつのだ。喪に籠る殯宮の儀式がなかったら、あの萬葉集中の人麻呂の日並皇太子尊をはじめとする殯宮のための秀れた挽歌はつくられなかったであろう。〔紀要〕の論文は、『浦島子考』という題名にするつもりであった。浦島子というのが日本書紀、萬葉集、丹後国風土記に記録されているのは、いかに古くから伝承されたかを証しだてている。わが国で最も古いこれらの書卷の浦島子は、私たちが知っている浦島太郎の話とはかなり違う。亀を助ける動物報恩譚の要素はない。日本霊異記に「亀の命を贖ひて放生し、現報を得て、亀に助けらるる縁第七」とあり、備後の三谷の郡の大領の先祖としてはじまるのだが、備後国三谷郡は現在の広島県双三郡である。これが十三世紀の宇治拾遺物語になると「亀を買って放つ事」となつて主人公は天笠の人となる。

萬葉集巻第九にある、詠水江浦島子の長歌並びに短歌と、日本書紀、風土記とでもかなり違う。

「秋七月、丹波の国余社の郡管川の人瑞江の浦島の子、舟に乗りて釣し、遂に大亀を得たるに、すなはち女に化為りき。ここに浦島の子、感りて婦とし、相逐ひて海に入り、蓬萊の山に到り、仙衆を歴り觀き。語は別巻にあり」（日本書紀巻第十四、雄略天皇二十二年の条）

「……嶋子独り小船に乗り、海中に汎び出でて釣するに、三日三夜を経て、一つの魚だに得ず、乃ち五色の亀を得たり、心に奇異と思ひて、船の中に置いて即て寝ねつるに、忽ちに婦人と為りぬ。其の客美麗しく、更比ふべきもなかりき。……」（丹後国風土記逸文）

私はロッキング・チェアにもたれ、五色の亀が美女に変身する幻想にとりつかれて行くのだった。

（中略）

卓上電話が鳴りつづいていた。私はロッキング・チェアから身をおこし受話器をとった。図書館長の声がつたわる。

「そろそろ出かけるとしましょうか。五分後に職員出入口のところで待っています」

夕食に館長が私たちを招待するというので、牡蠣舟^{かきふね}で妻と息子とおちあう約束であった。私は机の上の書物やノートを整理し、あす必要な書名を電話で館員へつたえた。指定した本や資料は、私が朝十時にきたときはデスクにそろっていた。

館長は先に待っていた。五時過ぎの庭園は蟬^{せみ}しぐれが耳にあふれ、私は夏をとりかえたような気持になった。正門まで玉砂利を敷きつめた歩道をあゆみながら館長は静かな口調で言った。

^c「昭和二十七年の夏、ここで蟬がいないかと思えますか」

すぐさま私にはどういう意味がふくまれているのか理解できなかった。

「七年目の夏です。蟬は卵としてうみつけられ、地下で育つてやつと七年目に蟬となるのを知ってるでしょう。だからわたくしは七年目の夏を待っていたのです。鳴きましたよ！ この土地で蟬がいないんです」

館長は力をこめて言った。「死滅しなかったんです。あんなむごい仕打ちをうけながら生きのびていたんです。すごい生命力だと思いましたが。とても人間なんかは……」

館長は急に声おとし息をついた。「いや、人間だって負けないと思うようになりました。たったひとりの息子が爆死したとき、わたしは生き甲斐をなくし、へたへたになつてこのまま死んでもいいと思ってました。それなのに、なんていうことです。ほら、このとおり二十数年間もピンピンしてて」

館長のうつろな笑いが短くつづいた。

しかし私には、あの見たすかぎりの焼跡に^{注(5)}どよもすように想われた。

「ぜんだつての週刊誌に、水谷君の研究業績がセンセイショナルに出てましたね。世界的な注目をあびているとか」彼の名のつくダイオードの開発のことを言っているのであった。

「息子は水谷君やあなたと戦時中ずっと一緒のクラスでしたね。そうそう、暗渠排水の勤勞奉仕のときも同じ家に宿泊したんですよ」

農家に分宿していたとき、夕食後に歌をうたったりしたが、私をふくめて軍歌や戦意昂揚こうようの歌を大声でどなったなかで、加来だけはモーツアルトの子守歌という歌をうたった。その高く澄んだ声と歌詞を想いだす。〈睡れよい子よ、庭や牧場に、

鶏も羊も、みんなねむれば……〉私は彼の歌をききながら彼の家庭を想いうかべていた。きつと彼は母親の口ずさむモーツアルトの子守歌で幼いときからやすらかに睡っていたのだろう。早く母を失った私には、いまだふれたことのない世界のように思われたのだった。

加来があのととき私の靴と間違えてマメができて歩きにくくなったと家に帰って言ったというのは嘘だ。泥田のなかで正座させられて、綴長の瀬山啓之が責任をとろうとしても教師は綴長だから認めなかったとき、加来は自から名のり出たのだ。けれども彼があんな言葉を口にしたのではない。このことを無言のうちに認めているのは私たちであった。彼は私たちのために自分でスケープ・ゴートとなつて教師の鉄拳制裁をうけ、足をくじってしまったのである。

D 私はこの事実を父親の館長に言うまいと決意した。ほんとうのことを知ると、きつと父親は死んだ息子をもつといとおしくなるに違いないからである。

分宿があつてから二ヵ月後、こんどは郊外の兵器工場に通年動員されたのである。旋盤やフライス盤の技術を身につけはじめたが、十四、五歳の少年たちに八時間の作業は、眼がかすむほどの重労働であった。昼めしはたった一杯の素うどんと一粒の梅ぼしだけのこともあつた。

工場で働きだして私たちのなかで最も流行した歌は、私たちが生まれたころはやったというマイブルーヘブンの青空であつた。旋盤のバイトのきしむ音、あるいは防空壕くうごうにひそんで、私たちは英語と日本語のないまじった歌詞を喉がかれるほどうたった。

E You will see a smiling face, fire-place, coziness……

たかが中学生が、なぜほほ笑みと、暖炉と、だんらんだんらんの部屋を歌ったのであろう。これらは私たちの未来に絶対に存在しないものだったのだ。やがて確実にくる死の水平線にあらわれる蜃気楼しんきろうだった。

「もうあまり時間がないですね。急がなくては」

館長は懐中時計を掌にのせてみてからステッキを大きく振りながら先にたつて歩きはじめた。

屋形船の魚料理屋はT字型の橋の少し下流の岸に舫^{もや}つてあった。川をわたつてくる風に臭気はなかった。私はサヨリでも泳いでいるような澄んで豊かな水と、さわやかな川風にむしろ暗い感情にひたされていった。あのときこの川は……。

妻たちは少し遅れてやつてきた。挨拶する息子を、加来の父親は太い眉根をよせ、上半身をのりだしてじっと見つめていたが、

「小学校三年生ですか。やっぱり家内をつれてこないでよかった」と、自分に言いかけするようにつぶやいた。

わたしはいまもここにいる。石段のそばにすわりつづけているのだ。ひとびとはわたしを人の影だという。けっして影ではないのだ。わたしはあのとときからずっとここにすわりつづけているのだ。

いったいだれなのだ。あれほど堅くいましめられていた器のふたをひらいたのは！ 一瞬にして雲はたちのぼり、ひとびとは狂ほしく叫び、腕ふりたおれ足ずりしつづ、肌は血したり髪もぬけおち、やがていのちたえた。常世^{とこよ}にすむべきものたちを、あの雲は根の堅州^{かたす}の国に墮^おし入れ、よろづのわざわいごとにおこつてしまった。修羅^イの妄執^{まじ}、怨念^{うんねん}にみちた幽氣^{うき}の世界、ここには人、けものにふまれる髑髏^{どくろ}の怒りと声^{こゑ}が地鳴りのようにひびかいあっている。

あちめ おゝゝ おゝゝ

また夏がやつてきた。みしらぬ多くのひとびとがあつまつてくる。としに一度の葬礼だというのか。それならばわたしたちの死に表現をあたえてくれるはずだ。あなたたちはほんとうの魂^{たま}しづめができたのか。いまこそきこう、わたしたちを常闇^{とこやみ}からつかえせるといふのか。蘇らせることがあなたたちにできるのか。

あちめ おゝゝ おゝゝ 御魂^{みたま}みに いましし神は いまぞきませる

道ゆくひとよ、わたしはここにすわりつづけ叫んできたのだ。けれどもあなたたちはわたしの声をきこうとしなかった。わたしのほんとうの姿をみてはいないのだ。あなたたちはわたしに写真機をむける。いったいあなたたちはなにを見、なにが写

しとれたというのだ。石の表面にある幽かな影をためつすがめつしているだけだ。もはやフィルムにもうつらないだろう。これまでわたしの前を多くのひとびとがとおつていき、わたしを珍しそうにながめたり、写しとろうとしていた。だからといって、あなたたちはわたしがもういなくなったのだと思つてはならぬ。

だれひとりとしてわたしが黄泉^{よみづくに}につうじる入口の比良坂^{ひらさか}をふさいでいる千人所引磐石^{ちびきい磐石}であることに気づいていないのだ。

この街を歩くとき、私の歩調は非常にはやくなった。東京より車が少ないからではない。街路樹のうわつた幅広い歩道は歩きやすかったが、私にはこの大地を踏みしめると、中学に通学していたころの記憶が脚の筋肉によみがえるようであった。中学では市電、市バスの乗車を禁止していたので、ほぼ半径六^{キロメートル} 軒^{キロメートル}のこのデルタの街をすべて歩かなければならなかったのである。しかも黒風呂敷で教科書などを包んだ重荷を左の小脇にかかえて。

市の中央にある記念公園でヨハン・シュトラース作曲の野外演奏会が催されることを知り、夕方からはじまる納涼音楽会に息子をつれていつてやろうと思った。

私は公園まで歩いて行くことを主張したが、妻はタクシーとまではいわないが、市電くらい乗ったつていいではないかと言う。私は歩いてこれないくらいならテレビでもみているがいいと言った。

「ほく、パパについていく」

息子はマンガの雑誌をほうり投げて声をあげた。

公園の近くにある市民球場では職業野球の試合があるらしく、照明灯がまだ明るい空を照らしていた。電車通りの歩道の右側は戦前からの寺の境内で、庭つづきに墓地がひろがっている。かつては大きな楠木^{くすのき}がそびえ、その木陰となる歩道のあたりが小さな坂道になっていたが、いまは平坦な道路になっていた。その先からは昔ながらのビル街である。

うしろに妻と息子の靴音があつた。私はこの土地にいた想い出のほうぼうに、こうした夕暮れのひとときがあつたような気がしていた。

大理石のどっしりした銀行の建物までくると、数名の外国人がしきりに玄関先で写真をとっていた。

「なんてことないじゃないか」

通訳らしい若者が舌打ちして、通りかかった私たちを呼びとめた。

「すいませんが、奥さんと坊ちゃんと一緒に写真のバックになつてくれませんかね。おねがいしますよ。なにしろ人がいなくちやニューヨークと変りばえがないんでね。^{注(9)}人間の影が石に焼付いているといったつて」

豪華船で世界一周する観光客にあるような金持ちで、仕合わせそうな老夫婦たちであつた。老紳士はキングス・クラウン・リーダーにあつたような英語の文章で言つた。「もしも奥さまがよろしいといわれるならば、あなたたち家族の桜の花のような微笑をこのカメラにむけていただきたい。楽しい思い出となるために」

私たちは大理石の石段をのぼつて、外国人たちのカメラにむかい、にこやかに笑いかけようとした。

その瞬間、私はふいに目まいをおぼえ、体から生気がぬげだしたように、ふらふらと前によるめいた。

私はたしかに見たと想つたのだ。石が虚ろ³に開き、人影のような黒布がふわっとかぶさつてきて捉えようとしたのを。

「パパ、どこへ行くの！」

私は精一杯に引きとどめている子供の力を全身に感じていた。

(桂芳久「火と碑」による)

*出題の都合上、本文を一部改変している。

注 (1) 半文——「文^{もん}」とは昔に用いられた足や靴の寸法を表す単位。一文は約二・五cm。したがつて「半文」は約一・二五cm。

(2) 暗渠排水の作業——地下に埋まっている水路の水を通す作業。戦時には中学生でも学校単位で勤労奉仕が課された。

- (3) ビッコ——片足が不自由なこと。現代では不適切な表現とされるが原文を尊重してそのまま記している。
- (4) 殯宮挽歌——死者の霊を安置する場所で詠まれた死者を悼む歌のこと。
- (5) どよもす——音や声を響かせること。
- (6) サヨリ——魚の種類。
- (7) 根の堅洲の国——日本神話に記される異界。その入口を黄泉と同じ比良坂としている記述が『古事記』にある。
- (8) 黄泉——日本神話に記される死の国。比良坂は現世と黄泉との境にあるとされる場であり、この通路は千人所引磐石で塞がれているとされる。
- (9) 人間の影が石に焼付いている——至近距離で原爆が炸裂したために銀行入口にある大理石の階段に被爆者の跡が焼きついた人影石のこと。現在では広島平和記念資料館で展示されているが、この頃はまだ銀行玄関前にあって「原爆名所」となっていた。

- 一 破線部ア「硬直」、イ「妄執」の読み方と意味をそれぞれ書きなさい。
- 二 Aについて、「教師」はどうしてこのようなふるまいをしたのか、「ためらった表情」の理由に注意しながら説明しなさい。
- 三 Bについて、「浦島子」の伝承の説明として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。
- ① 十三世紀以前の伝承では、海で魚釣りをしていた浦島子が思いがけず亀を捕まえる話であった。
- ② 日本書紀および風土記では、浦島子が捕まえた亀が美しい女性に変身したと記されている。
- ③ 浦島子の出自について、風土記では丹波国(現在の京都)とされるが、日本霊異記では備後国(現在の広島)と記されている。
- ④ 浦島子が捕まえられた亀を助けてその恩を受ける動物報恩譚は、宇治拾遺物語から始まる。

四 Cについて、館長のこの問いかけはどういう意図から発せられたものであったか、説明しなさい。

五 Dについて、ここで「私」はどうしてこのようなことを考えたのか、説明しなさい。

六 Eについて、中学生たちはどうしてこの歌をしきりに歌ったのか、「蜃気楼」が何に喩え^{たと}られているかに注意しながら理由を説明しなさい。

七 Fについて、この時の「私」の状況について、「私」がめまいのうちに見た「人影のような黒布」が何かに注意しながら説明しなさい。

八 この文章の表現と構成に関する説明として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

① この小説は、広島に滞在している三十九歳の「私」の現在時と、中学生だった頃のつらい戦争時の記憶と、戦争で無念の死を遂げた死者の聲がこだまする幻想的な想念と、この三つのパートによって構成されている。

② 亀に導かれて海底の異界を訪問し、玉手箱を開いて年老いたまま孤独に取り残される浦島子の伝承に、原子爆弾という禁断の器が開いたせいで永遠に石に刻まれる影となった原爆死者のイメージを重ね、鎮魂とはほど遠い戦後の広島の街と人々を描いている。

③ 古代の葬送儀礼を研究している「私」は、至近距離で原爆が炸裂したために銀行入口にある階段に焼きついた人影の石を、あの世とこの世とを隔てていると言われる日本神話の千人所引磐石に重ね、その死者の鎮魂されぬ無念の声を聞き取るうとしている。

④ 死滅せずに広島に響いた蟬の声、石に張り付いた死者の声、過酷な勤労奉仕中に口にした歌声、これら戦争の残響が、海外からの外国人観光客が向けるカメラには映らないものとして対比的に示されている。

⑤ 息子を失った加来一雄の父のやりきれなさや原爆が投下された過去の広島を生々しく想起する「私」の「想い出」が、広島を訪問する外国人観光客の屈託のない「想い出」という言葉と対比的に示されている。

〔1〕 次の古文は『栄花物語』(巻二)の一節で、村上天皇の子たちの誕生にまつわる物語である。

「こらさぶらひたまふ御方々、あやしう心もとなう、御子生れたまはざりけるほどに、^{注(1)}九条殿の女御、ただにもおはしまさで、めでたしとののしりしかど、女御子にて、いと本意なきほどに、^A平らかにてだにおはしまさでうせさせたまひぬるに、^{注(2)}元方の御息所、^Bただならぬことのよし申してまかでたまひぬれば、もし男御子生れたまへるものならば、またなうめでたかるべきこととに世の人申し思ひたるに、^{注(3)}一の御子生れたまへるものか。あなめでた、いみじとののしりたり。^b内よりも御剣よりはじめて、例の御作法の事どもにて、もてなしきこえたまふ。元方の大納言いみじと思したり。東宮はまだ世におはしまさぬほどなり、^C何のゆゑにか、わが御子、東宮にゐ誤ちたまはんと、頼もしく思されけり。

いみじく世の中にのしるほどに、九条殿の女御ただにもおはしまさずといふこと、おのづから世に漏り聞ゆれど、^{注(5)}元方の大納言、「いで、さりともしきこともありき」など、聞き思ひけり。^{注(6)}(太政大臣殿も九条殿もいとうれしう思すほどに、^{注(6)}上は、世はともあれかうもあれ、一の御子のおはするを、うれしく頼もしきことに思しめす、ことわりなり。

中略(ここには太政大臣(忠平)が政事を長男の小野宮の大臣(実頼)に託して死去する話が語られている。)

かかるほどに年もかへりぬめれば、天曆四年五月二十四日に、九条殿の女御、^{注(7)}男御子生みたてまつりたまひつ。内よりはいつしかと御剣もてまゐり、おほかた御有様、^{ありさま}心ことにめでたし。世のおぼえことに、騒ぎののしりたり。元方の大納言かくと聞くに、胸ふたがる心地して、物をだにも食はずなりにけり。「いといみじく、^cあさましきことをも、^Dし誤ちつべかめるかな」と、もの思ひつきぬ胸をやみつ、病づきぬる心地して、同じくは今はいかで疾く死なんとのみ思ふぞ、^Dけしからぬ心なるや。

九条殿には御産屋^{うぶや}のほどの儀式有様など、まねびやらん方なし。^E大臣の御心の中思ひやるに、さばかりめでたきことありんや。^{注(8)}小野宮の大臣も、一の御子よりは、これはうれしく思さるべし。帝の御心の中にも、よろづ思ひなく、あひかなはせたまへるさまに、めでたう思されけり。

注 (1) 九条殿の女御——「九条殿」は藤原忠平の次男で

右大臣の師輔。「女御」は師輔の娘の安子。

(2) 元方もとかたの御息所——「元方」は藤原菅根の次男で中納言の元方。「御息所」は元方の娘の祐姫。

(3) 一の御子——広平親王。

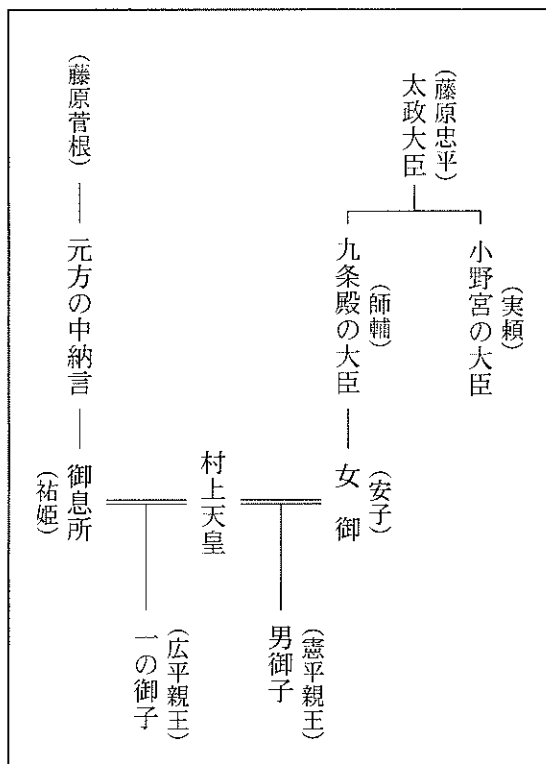
(4) 御剣——親王誕生の際に天皇から下賜される祝いの剣。

(5) (太政)大臣殿——関白の藤原忠平。

(6) 上——村上天皇。

(7) 男御子——憲平親王。

(8) 小野宮の大臣——藤原忠平の長男で左大臣の実頼。



一 破線部 a「いこら」、b「のしり」、c「あさましき」の意味を記しなさい。活用語の場合は終止形の意味を記すこと。

二 二重傍線部「きこえ」は誰から誰への敬意を表しているか。正しいものを次から記号で選びなさい。

① 「内」から「一の御子」へ

② 「二の御子」から「内」へ

③ 「内」から「御剣」へ

④ 「一の御子」から「御剣」へ

⑤ 語り手から「内」へ

⑥ 語り手から「二の御子」へ

三 A・Cを現代語訳しなさい。

四 B「ただならぬこと」とはどういうことか、具体的に記しなさい。

五 D「けしからぬ心なるや」について、語り手がこのように述べた理由について説明しなさい。

六 Eについて、この時の「小野宮の大臣」の心境を推測して記しなさい。

〔2〕

子列子窮、容貌有飢色。^{注(1)}客有言^{注(2)}之鄭子陽者。曰、列禦寇、蓋有

道之士也。居君之國而窮。君無乃為不好士乎。鄭子陽、即令官

遺之粟。^{注(3)}

子列子出見使者、再拜而辭。使者去、子列子入。其妻望之而

拊心曰、妾聞、為有道者之妻子皆得逸樂。今有飢色、君遇而遺

先生食、先生不受。豈不命也哉。

子列子笑謂之曰、。以人之言而遺我粟。至其罪我也、

又且以人之言。此吾所以不受也。其卒、民果作難而殺子陽。

(『列子』說符篇による)

*設問の都合上、一部訓点を省き、参考の注釈を含め文字を改変追補した箇所がある。

注 (1) 子列子——鄭国の哲人、列禦寇のこと。「子」は尊称。

(2) 鄭子陽——鄭国の君主。一説に鄭国の大臣ともされる。

(3) 粟——ここでは穀物の総称。

(4) 其卒——その後に、最終的に。

(5) 難——ここでは叛乱はんらんのこと。

一 A「君無乃為不好士乎。」に「君乃ち士を好まずと為すこと無からんや。」と読めるように返り点を施しなさい。

二 B「君遇而遺先生食、先生不受。」について、「遇」の意味に注意して現代語訳しなさい。また、「不受」と同じ意味を表す語を文中から抜き出しなさい。

三 C「豈不命也哉。」について、すべて平仮名で書き下しなさい。

四 文中の 部分に入る最もふさわしい文を次から一つ記号で選びなさい。

① 我非自知君也。

② 我非自好君也。

③ 客非自命我也。

④ 客非自好我也。

⑤ 君非自知我也。

⑥ 君非自命我也。

五 D「其卒、民果作難而殺子陽。」について、後代に左のような注釈が施されている。この注釈を参考にして、子列子の優れた処世術について九十字程度(句読点含む)で説明しなさい。

及子陽難作而子列子不見害。此真所謂不為外物之所傷累者也。

(子陽の難作るに及ぶも子列子は害せられず。此れ真に所謂外物の傷累する所と為さざる者なり。)

令和8年3月30日

令和8年度福島大学人間発達文化学類一般選抜（前期日程）における出題ミスについて

福島大学

このたび、令和8年2月25日（水）に実施しました令和8年度福島大学人間発達文化学類一般選抜（前期日程）の試験問題において、出題ミスがあることが判明しました。

受験者および保護者の皆様、高校関係者の皆様、地域社会の皆様には多大なご迷惑をおかけしましたこととお詫び申し上げますとともに、試験問題の作成・点検を、なお一層、入念に行い再発防止に努めていく所存です。

1. 選抜区分の概要

- （1）選抜区分 人間発達文化学類 一般選抜（前期日程）
- （2）試験実施日 令和8年2月25日（水）
- （3）試験科目名 国語
- （4）その他 人間発達文化学類 志願者数 625名／受験者数544名（国語55名）

2. ミスの概要

国語の大問Ⅰの三、文章（小説）を読ませて、選択肢の正誤を問う設問に不備がありました。「適当でないものを一つ選」ぶという条件の問題において、選択肢の文言の一部に誤記があり、「適当でない」選択肢が複数あることにより正解に至らないことが判明しました。

3. 受験者に対する対応

ミスがあった設問については、受験者全員を正解として扱います。

再度、採点を行った結果、合格者に変更はありませんでした。

【本件についての問い合わせ先】

福島大学入試課 024-548-8064

令和8年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 一般入試 前期日程

教育実践コース、心理学・幼児教育コース、人文科学コース

文章の理解力，文章から論理を構築する思考力，広く社会に対する日常的な問題意識，そしてそれらを基にした的確に表現する力を見ると同時に，記述した内容と形式から，人間の発達を将来支援する際に必要な資質や適格性を総合的に判断します。

令和8年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 一般選抜 前期日程

特別支援・生活科学コース

受験生の基礎学力（読解力、思考力、理解力、論理性、文章構成力など）とコースへの適性、及び特別支援教育や生活科学に対する意識や関心を把握するため、文章読解及び文章作成の課題を設定して、以下の視点で受験生の力量をはかる。

問1では、資料の内容を正確に読み取り、規定の字数内での確に表現するという観点から、基礎的読解力及び理解力をみる。

問2では、資料の内容を正確に読み取り、規定の字数内での確に要約するという観点から、基礎的読解力及び理解力をみる。

問3では、資料の内容を正確に読み取り、規定の字数内での確に要約するという観点から、基礎的読解力及び理解力をみる。

問4では、資料全体の内容をふまえ、自らの考えを的確に論じているかという観点から、思考力、文章構成力、論理性などを総合的に判断する。